

2025年度「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群調査研究事業概要

1. はじめに

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究は、福岡県・宗像市・福津市・宗像大社からなる「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会によって進められている。以下、令和7年度に本遺産群に関連して行われた各調査研究の概要を以下に報告する。

2. 特別調査研究事業

第2期特別研究事業は令和6年度から10年度までの5カ年計画で行っており、今年度は第2カ年目に当たる。第2期の課題は、①航海を軸としたアジア・太平洋、東アジアや日本列島内等、さまざまなレベルでの地域間交流の視点からの検討、②神話学・宗教学など新たな枠組みでの意義付け、③古代から中近世までの通史的な沖ノ島および宗像地域の祭祀についてのより解像度の高い復元である。さらに、基礎研究の推進のため、沖ノ島出土品を調査研究の対象とする国宝部会と地元の文化財担当者・学芸員からなる地域史部会の二つの部会を設けて取り組みを進めている。

(1) 第2回国際検討会

第2期2年目となる本年は「宗像における祭祀・信仰の歴史的変遷の世界的意義-The Global Significance of the Historical Transition of Rituals and Beliefs in Munakata」をテーマに、第2回国際検討会を開催した。

日 時：令和7年11月29・30日（土・日）

場 所：メルキュール福岡宗像リゾート&スパ

趣 旨：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、古代から現在まで続く「神宿る島」沖ノ島を崇拝する文化的伝統の物証である。4世紀から9世紀にかけて航海安全を願う祭祀により沖ノ島に捧げられた

8万点の奉獻品は、東アジアにおける諸国家間の重要な交流を示すものとして、世界遺産に登録されている。このように、宗像地域における祭祀と信仰の変遷は海を介した古代東アジアの交流による影響を背景とした固有の信仰の発展の文脈で理解される。

しかしながら、近年の研究や本特別研究事業の成果により、宗像における祭祀の変遷は様々な要因により変化してきた事が明らかとなってきた。

宗像において自然崇拝に基づく固有の信仰が歴史的に変化した主な要因として考えられるのは、①海域のネットワークによる地域間交流、②仏教をはじめとする外来の思想および文化の到来等の異文化交流、③中央権力と地域勢力の関係を含む社会構造の階層化・複雑化、④部族・首長制段階を経て国家形成期・古代・中世・近世から現代に至る時代の変化、とくに、古代から中世へ等の過渡期の問題、⑤自然環境の変化、⑥人間の認知的な構造と自然環境の関係、等があげられる。

本検討会では、本遺産の特質である「祭祀の変遷」に焦点を当て、考古学、宗教学、文化人類学、民俗学、歴史学など様々な角度から「祭祀・信仰・宗教の変化とその要因」を考えると共に、世界の宗教的思考・行為の歴史の中に宗像の祭祀・信仰を具体的に位置付ける事を目指す。

講演者：

ファビオ・ランベッリ（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）

菊地 大樹（東京大学史料編纂所教授）

鈴木 正崇（慶應義塾大学名誉教授）

マイク・パーカー・ピアソン（ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン考古学研究所、考古学）

議 長：

佐藤 信（専門家会議委員長、東京大学名誉教授）

溝口 孝司（専門家会議委員、九州大学教授）

委託研究者：

秋道 智彌（山梨県立富士山世界遺産センター、総

合地球環境学研究所名誉教授)

禹 在柄 (忠南大学校教授)

高田 貫太 (国立歴史民俗博物館)

田中 史生 (早稲田大学教授)

笹生 衛 (國學院大学教授)

大高 広和 (大正大学文学部専任講師)

研究協力者：

王 海燕 (中国浙江大学教授)

国宝部会：

河野 一隆 (東京国立博物館学芸研究部長)

辻田 淳一郎 (九州大学教授)

橋本 達也 (鹿児島大学博物館教授)

地域史部会：

岡寺 未幾 (福岡県九博・世界遺産室)

正田 実知彦 (福岡県九博・世界遺産室)

野木 雄大 (福岡県文化財保護課)

加藤 和歳 (福岡県九州歴史資料館)

池田 拓 (宗像市世界遺産課)

太田 智 (宗像市世界遺産課)

岡 崇 (宗像市世界遺産課)

向井 浩太 (宗像市世界遺産課)

井浦 一 (福津市文化財課)

池ノ上 宏 (福津市文化財課)

崎野 祐太郎 (福津市文化財課)

高木 慎太郎 (福津市文化財課)

オブザーバー：

鈴木 地平 (文化庁文化資源活用課文化遺産国際協力室、文化財調査官)

岡田 保良 (日本イコモス国内委員会委員長)

会議次第：

1. 課題整理

笹生 衛「概念整理 ―日本列島における神 (カミ)・祭祀 (マツリ)、環境と認知―」

2. コメント

溝口 孝司「国家形成と宗教:議論の補助線として」

3. 講演

マイク・パーカー・ピアソン「新石器時代からローマ鉄器時代までの英国における社会・祭祀・宗教」
ファビオ・ランベッリ「宗教的实践と思想の変化、および聖なるものに関する学術的理解の変化：理論

と方法」

菊地 大樹「山の宗教・仏教史の立場から、宗像の祭祀・信仰を考える」

鈴木 正崇「山岳信仰・民俗学の立場から宗像の祭祀・信仰を考える」

4. 課題整理

田中 史生「古代・中世の北部九州をとりまく国際環境・交流環境 ―宗像・沖ノ島地域の国際環境を考えるために―」

5. コメント

禹 在柄「5～6世紀における倭国と百済の王権・地方勢力間の相互作用」

高田 貫太「古墳時代の日朝関係史から見た沖ノ島祭祀」

王 海燕「古代中国の地域間交流と航海信仰」

大高 広和「宗像三女神」

秋道 智彌「ジェンダーと海の祭祀―沖ノ島信仰と船霊女神の出現―」

6. 総合討論

「歴史的な文脈から宗像の祭祀・信仰の意義を考える」

司会 佐藤 信

「宗像の祭祀・信仰の世界史的意義を考える」

司会 溝口 孝司



写真1 第2回国際検討会

(2) 国宝部会

今年度は、前年度に引き続き宗像大社神宝館所蔵資料の調査を行っている。調査対象は沖ノ島から流出したと伝わる資料群で、鏡、甲冑片を含む金属製品、滑石製品、貝製品である。

石製品・石製模造品、鏡および武器・武具などの金属製品を対象として宗像大社神宝館での調査を行った。

ア. 国宝部会の開催

第一回（オンライン）

日 時：令和7年9月18日（木）

議 題：今年度事業について

第二回（オンライン）

日 時：令和7年12月8日（月）

議 題：調査状況・報告書執筆

第三回

日 時：令和8年3月9日（月）

場 所：宗像大社神宝館

議 題：調査成果の報告と検討

イ. 資料調査

① 神宝館での調査

- ・石製品・滑石製品

調査者：河野 一隆

日 時：11月13日～15日（木～土）

- ・鏡

調査者：辻田 淳一郎

日 時：10月10日（金）

- ・金属製品・貝製品

調査者：橋本 達也、水野 敏典

日 時：8月5～8日（火～金）※

9月24・25日（水・木）

10月27・28日（月・火）

※橋本氏のみ

② その他の調査

- ・元興寺文化財研究所

調査者：橋本 達也

日 時：8月20日（水）

- ・福津市カメラステージ歴史資料館

調査者：橋本 達也

日 時：12月1日（月）

（3）地域史部会

地域史部会は福岡県・宗像市・福津市・宗像大社の文化財担当者・学芸員からなる。本遺産群につい

て分野を超えた調査研究を推進して、より解像度の高い宗像の祭祀の復元を目指して設置された。今年度は6回開催し、各自の調査研究についての進捗状況の共有を行った。

第1回 令和7年5月21日（水）

令和7年度事業について

第2回 令和7年7月16日（水）

池ノ上 宏「響灘・玄界灘東部における海浜型古墳について」

太田 智「宗像系文物からみた地域間交流」

第3回 令和7年9月17日（水）

野木 雄大「宗像神信仰の国内伝播の研究」

第4回 令和7年11月5日（水）

池田 拓「明治期・沖ノ島海軍望楼」

岡寺 未幾「記録写真による沖ノ島祭祀遺跡の復元—とくに22号遺跡を中心として—」

第5回 令和8年1月21日（水）

岡 崇「沖ノ島祭祀遺跡のモニタリングの展望」

正田 実知彦「沖ノ島祭祀遺跡の景観分析」

第6回 令和8年3月11日（水）

加藤 和歳「沖ノ島および周辺遺跡出土金属器の構造技法解析」

井浦 一・崎野 祐太郎「新原・奴山古墳群の成立と変遷」

高木 慎太郎・向井 浩太「宗像系須恵器の基礎的研究—須恵器坏を中心に—」

（岡寺 未幾 福岡県九州国立博物館・世界遺産室）

3. 宗像大社にかかる調査研究

(1) 考古資料

ア. 土器詳細台帳の作成

平成29年度より、報告書に基づく土器詳細遺物台帳の作成作業を九州大学考古学研究室と行っている。本年度は、令和7年5月から3月まで実施した。

(福岡 真貴子 宗像大社文化局)

イ. 金属製品のX線撮影による調査分析及び金属製品デジタル台帳の構築

沖ノ島祭祀遺跡から出土した金属製品は、発掘から半世紀以上が経過し、劣化が懸念されている。この状況を受け、令和6年度より、当該資料と宗像市・福津市から出土した金属製品のX線透過写真撮影とデジタル台帳の作成を行いその成果をMUNAKATA ARCHIVES「金属製品のX線画像」として一般公開している。

なお、令和6年度は保存台に固定されている金属製品の撮影を行ったが、アクリルケース等で管理されている資料が数多く存在する。その一部でも資料化を進めるため、今年度は7号・8号遺跡および国宝部会で調査予定の沖ノ島返納品資料の金属製品資料についてX線透過写真撮影および整理作業を行った。本事業は福岡県岡寺、宗像市太田智・西依由里香、宗像大社菊池宣行・福岡真貴子が行い、X線透過写真撮影については公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。必要に応じて特別研究事業国宝部会水野敏典氏、橋本達也氏のアドバイスを受けた。X線撮影にあたっては、国宝の負担を避けるため、撮影機材を宗像大社神宝館に搬入して行うこととした。作業は、準備を令和7年8月26日(火)・28日(木)、X線撮影9月8日(月)から11日(木)、撮影後の整理を令和8年1月14日に行った。

ウ. 国宝部会による資料調査

特別研究事業国宝部会を参照。

(岡寺)

(2) 宗像大社文書調査

2017年度から継続して「宗像清文氏奉納文書」のうち書簡・公文書等の一紙ものの目録の作成を行っている。2025年度は2026年1月までに19回の調査を実施し、年度内にさらに数回の調査を予定している。

調査は、宗像大社文化局、福岡県教育庁文化財保護課、福岡県立アジア文化交流センター、九州歴史資料館、福岡市博物館市史編さん室が協力して行い、今年度は史料の全体数の把握とこれまでに作成した目録の精査を並行して実施した。『宗像神社史』に別の名称で引用されている史料のうち、本件に含まれるものがあることが判明したため、目録において対応関係の整理も進める。

なお、「宗像清文氏奉納文書」に係る調査成果の一部は、第2期特別調査研究事業の成果報告書において公開する予定である。

(野木 雄大 福岡県文化財保護課)

(3) 経過観察

ア. 「宗像神社境内」全体に関する調査

宗像大社沖津宮の沖ノ島、小屋島、御門柱、天狗岩の構成資産については、周辺海域を含めた釣人などのモニタリング調査を10回(1月11日(土)・2月11日(火)・3月2日(日)・4月26日(土)・5月3日(土)・6月7日(土)・9月17日(水)・10月11日(土)・11月9日(日)・12月16日(火))実施した。そのうち10月11日と11月9日は各祭祀遺跡の詳細なモニタリング調査を実施し、12月16日には、沖ノ島祭祀遺跡の全遺跡について360度撮影を実施した。

あわせて、国指定沖ノ島特別鳥獣保護区及び国指定沖ノ島鳥獣保護区となっている沖ノ島と小屋島、御門柱、天狗岩は、環境省九州地方環境事務所によって外来ネズミ類がオオミズナギドリやカンムリウミスズメなどに与える影響を調査した。

中津宮は、11月6日(木)の午前中に御嶽山祭祀遺跡等のモニタリング調査を実施し、あわせて沖津宮遙拝所の見回りを行った。

辺津宮は、11月6日(木)の午後3時から資産の見回りと共に祭祀遺跡のモニタリング調査を実施し

た。中津宮、辺津宮は、ともに宗像市世界遺産市民の会の協力の基に実施した。

現地調査関係者は以下の通りである。

○宗像大社沖津宮

東京文化財研究所 松浦 一之介

環境省九州地方環境事務所 戸田 博史

九州環境管理協会 岡部 海都

福岡県九州国立博物館・世界遺産室 正田 実知彦
栗山 凌

宗像市世界遺産課 岡 崇 池田 拓 鎌田 隆徳

○宗像大社沖津宮遙拝所、中津宮、辺津宮

宗像市世界遺産市民の会 吉武 貴章 魚住 久信
光永 真 吉開 智子

宗像市世界遺産課 岡 崇

イ. 構成資産 1 沖ノ島

9号遺跡、10号遺跡、10号遺跡東側における遺物の出土状況について重点的にモニタリング調査を実施した。その結果、露出した遺物の移動はあるものの、新規に金銅製品等の優品は認められなかった。遺物の露出が減った理由の1つとして毎月調査を実施することで、気配を察知したオオミズナギドリは、9号遺跡、10号遺跡周辺での営巣活動をやめて、他の場所に移したことが原因ではないかと考えられる。

8号遺跡北側の礫の下から露出した鉄製品については、大きな風化もなく原位置を留めている。こちらも今年から重点的にモニタリングを続けている。

ウ. 構成資産 2 小屋島

令和6年8月24日（土）に宗像市モニタリング調査と共に実施した環境省の調査で小屋島に上陸しカメラ2台を設置、同時に外来ネズミ類の生息確認に備えて捕獲器の設置場所の候補地などの現場確認を行った。

12月5日（木）に環境省で実施したモニタリング調査で小屋島に上陸し、カメラ2台を設置、同時に外来ネズミ類の痕跡（捕食痕・糞等）の有無を観察

したが、外来ネズミ類の侵入を示す痕跡等は確認されなかった。

令和7年3月1日（土）に環境省の調査で回収したカメラのデータに1頭のネズミ類が写し出されていたことから、小屋島に再度ネズミが侵入したことが確認された。

そのため急遽、翌3月2日（日）に宗像市モニタリング調査と共に実施した環境省の調査で小屋島に上陸しネズミ用の捕獲器（かごわな）を12か所設置した。

3月9日（日）に実施した環境省の調査で捕獲器にネズミが1頭捕獲され、クマネズミと同定された。形態的特徴からカメラに映っていた個体ではないかと考えられた。

6月7日（土）に宗像市モニタリング調査と共に実施した環境省の調査で同行した環境省職員等が小屋島に上陸し、3月に設置したセンサーカメラの撮影データを回収した（カメラは電池を交換し継続設置）。カメラを設置した3月9日～6月7日の期間にクマネズミは写っていなかった。このため侵入したクマネズミは捕獲された1頭のみで、駆除は成功した可能性が高いと判断された。

エ. 構成資産 3 御門柱

上陸せず、船内からの目視で大きな変化はない。

オ. 構成資産 4 天狗岩

上陸せず、船内からの目視で大きな変化はない。

カ. 構成資産 5 沖津宮遙拝所

11月6日に宗像市世界遺産市民の会とともに資産見回りを実施し、大きな変化はなかった。岩瀬海岸は、大きなプラスチックゴミが目立ったが、11月22日に実施した清掃活動で回収した。

キ. 構成資産 6 宗像大社中津宮

8月10日から11日にかけて宗像地域を襲った大雨で参道の一部が崩落した。

11月6日に宗像市世界遺産市民の会とともに御嶽山祭祀遺跡のモニタリング調査を実施し、昨年同

様、御嶽山山頂から南側斜面にかけて土器の散布が認められた。

ク. 構成資産 7 宗像大社辺津宮

11月6日に実施した宗像市世界遺産市民の会の見回り活動では大きな変化は認められなかったが、高宮祭場の南側には、須恵器などの遺物の露出が目立った。

その他境内における特記事項については撰末社の修復が今年度終了した。また、第1駐車場の整備を行った。

ケ. その他の調査

○釣人調査

令和7（2025）年に実施した沖ノ島とその周辺の防波堤や岩礁、小屋島、御門柱、天狗岩に上陸している釣人の人数を調査している。

2月、4月、6月に比べ、7月から12月までの下半期のモニタリングでは釣人が確認されなかった。この結果は、モニタリング調査日と釣人が渡島した日が合わなかったことが原因であり、全く釣人が上陸していなかったわけではないが、全体的に減少傾向にあるのではないと思われる。

○沖ノ島視認調査

沖ノ島視認調査は、沖ノ島への眺望が世界遺産の価値の1つでもあることから、2018年6月から運用を開始し、視認データの集計を2021年から実施している。大島の北、大島砲台近くのトイレ壁に設置したカメラから、約48km離れている沖ノ島の見え方をほぼ毎日午前9時前後と午後3時前後の2回写真データを取得している。また、アプリ「みちびき沖ノ島」では24時間いつでもだれでも携帯電話などの媒体を通じて見るができるようになっている。

令和7（2025）年は、8月10日から11日にかけて宗像地域を襲った大雨でカメラが故障し、その後点検を行い9月23日に復旧したものの、10月4日に再び襲った雷雨で再び故障し、点検後の10月30日から復旧した。そのため8月から10月までのデータが取得できず、グラフに調査結果を掲載することができ

なかった。

今年も例年通り3月から6月までは、沖ノ島の視認があまり良くない状態が続き、7月以降は、視認の良好な状態が続いていたものと思われる。

5年間継続して調査を実施しているが、各月による小さな変動はあるものの、全体を通じて、ほぼ毎年同じ傾向で沖ノ島の見え方が推移していることがわかる。

（岡 崇・宗像市世界遺産課、正田 実知彦・福岡県九博・世界遺産室）

4. 宗像市管内文化財調査

（1）宗像市管内遺跡調査

本年度は、2件の埋蔵文化財発掘調査を実施した。野坂榎元遺跡は、円墳二基と弥生時代の貯蔵穴群の発掘調査を行った。1号墳は、粘土槨に割竹形木棺を収めた第一主体部と礫床の木棺墓を検出し、古墳時代前期後半から中期前半頃と考えられる。2号墳は、5世紀後半頃の竪穴系横口式石室で、福津市勝浦井ノ浦古墳の前方部主体部に類似する。

もう一件の池田桜B-3号墳は、6世紀末頃と考えられる60～70mほどの前方後円墳で、令和6年度より墳丘規模や墳形のトレンチ調査を進めている。

（2）史跡宗像神社境内撰末社修理事業

宗像大社辺津宮本殿・拝殿の周囲には、江戸期の絵図にも確認できる22棟の撰末社が配置され、史跡の本質的価値を構成する諸要素のひとつとなっている。令和2年度より修理事業を開始しており、本年度は残る3棟（織幡神社、牧口神社、御鑑持神社）の解体修理を行い、これをもって本事業は終了した。

（白木 英敏・宗像市世界遺産課）

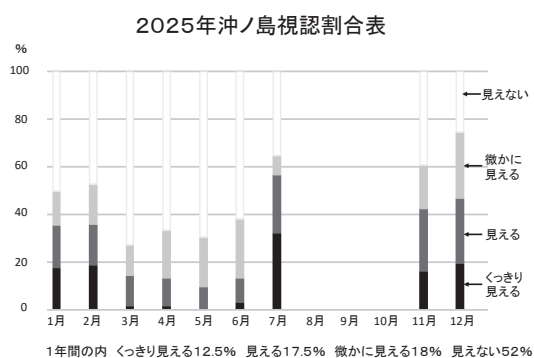
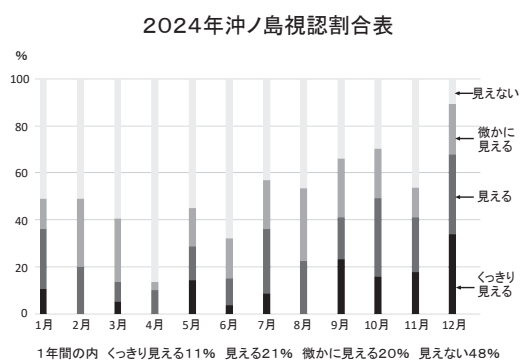
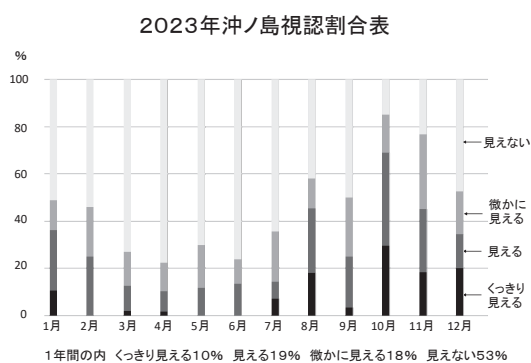
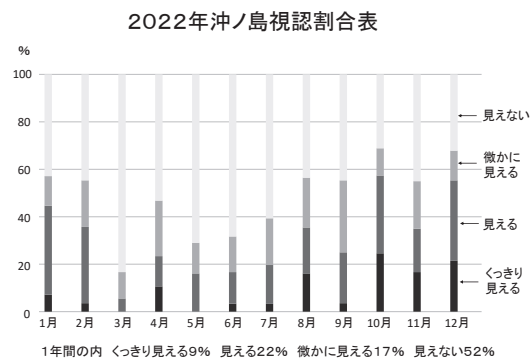
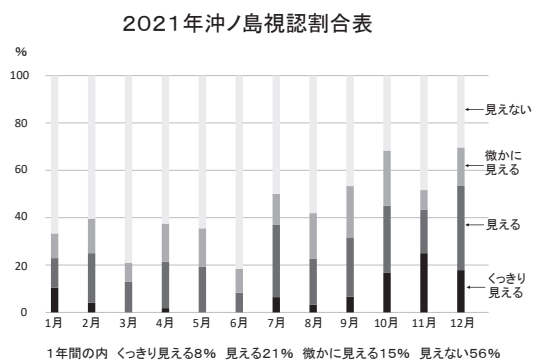


図1 沖ノ島視認割合表 (2021年から2025年)



写真2 新原・奴山6号墳の石室調査



写真3 新原・奴山5号墳の墓室調査

5. 新原・奴山古墳群に関わる調査

新原・奴山5号墳と6号墳は、ともに6世紀後半頃に築造された単室構造の横穴式石室を有する円墳である。墳丘規模は、5号墳が直径約13m、6号墳が直径約10m強を測る。両古墳は大型農業施設建設に伴う昭和55年の記録保存調査を経て消滅したと考えられていたが、令和6年に残存状況の確認調査を実施したところ、5号墳と6号墳ともに石室の一部が残存することを確認した。令和7年の継続調査では、5号墳と6号墳の石室内流入土砂を撤去し残存状況を把握した他、昭和55年調査時に調査区外へ延びていた墓道未掘部を検出し、発掘調査した。5号墳と6号墳の確認調査は、令和8年3月で終了する予定である。

(崎野 祐太朗 福津市文化財課)

6. 福津市管内文化財調査

令和7年度は開発に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査はなかったが、前年度発掘調査を実施した蓮鳥遺跡第4地点と宮司蓮町遺跡第2地点の報告書刊行を行った。前者は堅穴建物2棟、溝1条、土坑2基、小穴多数が検出された古墳時代及び中世の集落遺跡である。後者は溝2条、小穴多数が検出された弥生時代及び古墳時代の集落遺跡である。

発掘調査以外では、分布調査により前方後円墳と判明した奴山沖田1号墳について一部の地形測量調査を実施した。全長45m程度に復元できる前方後円墳で、新原・奴山古墳群と谷を一つ隔てた南方に位置する。規模や形状が新原・奴山12号墳に類似する。

また全国Q地図を参照し、福津市管内の赤色立体地図に基づき現地を確認する分布調査を試験的に実施した。これまで把握できていなかった古墳が多数確認されており、継続調査による遺跡分布地図補完の必要が生じている。

(松永通明 福津市文化財課)

7. その他の活動報告

(1) 公開講座

令和7年度文化庁補助事業「地域文化財総合活用推進事業」を受け実施したもの。

今年度は「いま、世界遺産を考える」をテーマに世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界遺産登録に関わった専門家を招き、本遺産群の今後について考えた。会場は海の道むなかた館で行った。講演の様子は公式YouTubeにて後日公開予定。

第1回 西谷 正「世界遺産と考古学 朝鮮半島の世界遺産を考える」

日 時：令和7年9月20日（土）

第2回 三輪 嘉六「世界遺産と文化財 あらためて、沖ノ島を考える」

日 時：令和7年10月18日（土）

第3回 金田 章裕「世界遺産と文化的景観 イギリス・オーストラリアの世界遺産から考える」

日 時：令和7年11月15日（土）

第4回 岡田 保良「建築学と世界遺産 オリエンタルの世界遺産から考える」

日 時：令和7年12月20日（土）

第5回 稲葉 信子「世界遺産学 世界遺産の歴史からその意義を考える」

日 時：令和8年1月17日（土）

第6回 佐藤 信「世界遺産と歴史学 東アジアの歴史的文脈から」

日 時：令和8年2月21日（土）



写真4 公開講座チラシ

(2) 海外での価値発信

ア. 第10回世界考古学会議 (WAC10)

場 所：ダーウィン、オーストラリア

日 時：令和7年6月20日（金）から29日（日）

出張者：岡寺 未幾

・70ヶ国から2000人を超える参加者、オンラインでの参加者を含めると2500人を超える WAC 史上最大規模の会議。

・会長は九州大学の溝口孝司先生。12年間という異例の長期間にわたり会長を務め、今回で退任。

・「T21/S04 成立宗教の到来と固有の信仰の変化」と「T14/S10次世代教育で世界遺産とコミュニティをつなぐ」の二つのセッションを実施。

・T21/S04は、令和6年度第2回国際検討会の講演者と実施。

T21/S04：成立宗教の伝播による固有の祭祀・信仰の変化

The Change in Indigenous Rituals and Beliefs Due to the Spread of Established Religions

日 時：令和7年6月25日（水）

方 式：ハイブリッド

議 長：サイモン・ケイナー、セインズベリー日本芸術研究所考古学・文化遺産センター所長、エグゼクティブディレクター

ガミニ・ウィジェスリヤ、WHITRAP 特別顧問、世界考古学会議元副会長

溝口 孝司、九州大学教授

岡寺 未幾、福岡県参事補佐

概要：仏教という成立宗教の伝播は、古代社会において思想・社会構造・宗教・芸術と様々な面で影響を与え、現在まで大きな影響を与え続けている。その影響は海域ネットワークでつながる島嶼部で特に顕著である。日本固有の祭祀・信仰の1600年にわたる変化がみられる世界遺産「神宿る島」沖ノ島でもその影響は大きく見られる。仏教の伝播は、巨岩で行われていた祭祀から社殿を成立させ、祭祀の変化に多大な影響を与えた。生きている信仰の資産であるこの資産では、古代東アジアにおける諸国間の交流により、固有の祭祀・信仰が変化していく過程プロセスを見ることができる。このセッションでは、

成立宗教の伝播がどのように祭祀・信仰の変遷に固有の信仰に影響を与えたのか、世界遺産である「神宿る島」沖ノ島の祭祀の変遷を軸として、世界中の島嶼部における事例比較を通して考えてみたい。

1. 祭祀行為を通じた宗教の進化の追跡：祈りの形態の変化を映す小宇宙としての沖ノ島

溝口 孝司、岡寺 未幾

2. スリランカにおける仏教の伝来とその儀礼的景観への影響

ガミニ・ウィジェスリヤ

3. 西太平洋諸島の伝統と植民地化の歴史における儀式と信仰の変化：2つのケーススタディ

クリストフ・サンド、ニューカレドニア政府上級考古学者、フランス国立持続可能開発研究所上級研究員、ヌメア、GDR SENS

4. 宗教転換の考古学：奈良からノリッジプロジェクトにおけるキリスト教と仏教の採用

サイモン・ケイナー

5. カシミール仏教の遺産をたどる：悟りへの旅

ナジム・フセイン・アル・ジャフリ、ジャミア・ミリア・イスラミア大学教授、インド、オンライン

6. 大アジアにおける宗教システムの継続と変化における仏教とヒンドゥー教の洞窟寺院、岩窟宗教建築、岩窟の役割

ニコラス・ロバーツ、オーストラリア、ケアンズ、ジェームズ・クック大学ケアンズ研究所兼任研究員、オーストラリア、ケアンズ、クイーンズランド州交通・道路局文化遺産担当官

7. 土地の神から周縁へ：タイの繁栄信仰におけるナン・クワックの疎外

アルハナ・ロチャン、デリー大学、インド



写真5 世界考古学会セッション T21/S04

T14/S10 次世代教育で世界遺産とコミュニティをつなぐ

Connecting World Heritage Sites with Local Communities through Education for the Next Generation

日 時：令和7年6月26日（木）

形 式：報告・議論

司 会：ファティハ・ポリン、Perceive 創設者兼 CEO、バングラデシュ

岡寺 未幾、福岡県庁、日本

パティボン・ヨッスラン、カセサート大学、タイ

概要：遺産を保護するためには、地域社会との関わりが不可欠である。現在、世界遺産では、遺産そのものを保護するだけでなく、無形遺産を含む文化遺産、遺産が存在する地域の自然や環境も保護する必要がある。しかし、多様な人々で構成される地域社会との関わりは容易ではない。そのため、地域の将来を担う若い世代との関わりが必要であると考え

る。本セッションでは、バングラデシュ、日本、タイなどにおける世界遺産教育の事例を紹介する。初等教育から高等教育、一般教育から専門教育、理論から実践まで、幅広い取り組みを紹介する。若い世代がどのように遺産について学び、地域社会と遺産の架け橋となっているのかを見ていく。これらの事例を通して、遺産と地域社会を結びつけ、未来に遺産を残していく方法を考える。

方 式：ハイブリッド

1. 人々と共に過去を読む―「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の場合―

岡寺未幾、福岡県、日本

2. タキシラの仏教遺産の維持：遺産所有権論争の解決における教育の役割

ムハンマド・テマッシュ・カーン博士、アーカイブ担当、アガ・カーン大学（パキスタン、カラチ）
シャキール・ウッラー博士、考古学部長/教授、ハザーラ大学（パキスタン、マンセラ、タキシラ）

3. 遺産を受け入れる：洞察から影響へ

ネパール、ハヌマーンダカ宮殿博物館開発委員会、
レヌ・マハルジャン

4. 若者たちを触媒として：タイにおけるコミュニティと文化遺産の架け橋

パティボン・ヨートスラン、タイ・バンコク、カセサート大学建築学部

5. 文化遺産保護における地域社会の関与：ナイジェリア、スクル文化的景観の事例

アキンボワレ・アキンタヨ、英国ヨーク大学考古学部

6. バングラデシュにおける世界遺産の保全に地域社会と若者を巻き込む

ファティハ・ポリン、Perceive 創設者兼 CEO、バングラデシュ

バングラデシュ・ドゥジタ・カスフィ、Perceive（バングラデシュ）建築家兼研究者

7. 世界遺産の複合遺産－地域社会を結びつける機会。ルーマニアの事例

セルギウ・ムステアタ教授、UNESCO UNTITWIN ネットワーク、ルーマニア・タルグイシュテのヴァラキア大学

8. 私たちはマクリをつなぐ：災害と地域紛争の管理における若者と地域社会の役割

ザヒダ・クアドリ、パキスタン・シンド州政府文化・観光・古代遺跡・公文書局、ICOMOS パキスタン、国際博物館協議会



写真6 世界考古学会セッション T14/S10

カカドゥ国立公園

令和7年6月25日に実施されたミッド・コングレス・ツアーへ参加。カカドゥ国立公園は会議場所から300km離れた場所にある。

・セルフ・ガイドツアーとして、個人で岩絵を巡るルートが整備されている。巡ったのはブルンクイとウビルーの二箇所。巨大な岩にアボリジニが描いた

先史時代から20世紀までの3000を超える岩絵が残されている。

- ・ルートは動線、手すりなど、自然に配慮した形で整備されており、サインはかなり少なめに抑えられている。一人で訪れていたら不安に感じるくらい少なく、一人だったら道に迷ったかも、という所もあった。岩絵の解説は総じて少なめ、解説の内容もボリュームも場所によって統一されていない。なお、レンジャーによる解説ガイドツアーも有償で実施。

- ・「現在、祭りの時期であるため、この巨岩に描かれている岩絵の写真を撮らないでください」などの注意書きもみられた。

- ・カカドゥ国立公園では、アボリジニの反対を押し切る形でウラン開発が長年行われており、輸出先の日本において福島第一原発の事故につながったことから、アボリジニの人たちに多大な衝撃を与えている、あわせて景観破壊や健康被害なども問題となっており、世界遺産委員会からモニタリングの対象となっている。



写真7 カカドゥ国立公園



写真8 踊る人々の岩絵

イ. 東アジア考古学会 (SEAA10)

日時：2025年8月18日から26日 出張者：岡寺

場所：アバディーン大学 (英国、アバディーン)

- ・東アジア考古学会 (SEAA) は、東アジア地域の考古学に特化した唯一の国際学会であり、国際的に活動する研究者が一堂に会する。

- ・参加者は20カ国から322人、33のセッションで288件の発表。参加者数は前回の185人から322人に増加し、過去最高。・中国・韓国からの研究者の姿が目立つが、日本からの参加者は総じて少ない。

- ・初日に基調講演が行われ、宮本一夫名誉教授 (九州大学) が講演。

- ・東アジア考古学のパイオニア的存在であるジナ・バーンズ (Gina Lee Barnes) 氏を顕彰するセッション (Queen Mother of the West: Papers in Honor of Professor Gina Lee Barnes and her contribution to Japanese archaeology) が行われ、縄文・古墳時代をはじめ日本考古学の報告が行われていた。

- ・NARA to Norwich のイベントで本遺産群のプロモーションを実施。PPT やパンフレットで資産の説明を行うと共に、資産の概説と金銅製矛鞘の調査研究成果などを伝える。

- ・これまで SEAA5 (福岡、2012年) と SEAA7 (米国ボストン、2016年) に参加。世界遺産登録後初の参加。これまでの2回と比べ、認知度が格段に向上している感触を得た。



写真9 東アジア考古学会でのイベント (SEAA)

ウ．韓国国立全州博物館 国際シンポジウム
「東アジア海洋祭祀と交流」

日 時：令和7年10月22日（木）から25日（土）

出張者：岡寺 未幾

竹幕洞祭祀遺跡は全羅北道扶安郡の海岸にある祭祀遺跡である。古代から現在まで続く祭祀の場であり、かつ、沖ノ島と共通した祭祀遺物が奉献されている。このことから、沖ノ島祭祀遺跡との比較研究の対象となっている。

1991年に国立全州博物館による発掘調査が行われ、1994年には発掘調査報告書が刊行された。1998年には沖ノ島を研究する日本の研究者を招聘しての国際会議が行われ、日韓交流の考古学の学史上においても非常に重要な遺跡である。



写真10 竹幕洞祭祀遺跡

このため、本遺産群についても世界遺産登録の初段階から竹幕洞祭祀遺跡については比較研究が行われてきた。かかわっていただいた主な研究者に、ソウル大学名誉教授イム・ヒョジュ氏、韓国国立中央博物館ユ・ビョンハ氏、そして特別研究事業の委託研究者であり、現在もかかわっていただいている忠南大学校禹在柄氏がいる。

今回のシンポジウムは、竹幕洞祭祀遺跡出土の土器の再整理事業に伴い、竹幕洞祭祀遺跡の国際的な意義づけをしようとするもの。韓国から5名、中国から1名、ベトナムから1名、日本から2名の研究



写真11 パネル・ディスカッション

者を招いた国際シンポジウムである。来場者は、一般および博物館関係者、大学など研究機関所属の専門家等であった。竹幕洞の祭祀遺跡の最新の研究果のみならず、海洋信仰の側面からをテーマとしており、考古学と無形遺産、古代と現代、東アジアを視野に入れたシンポジウムは大変意義深いと考える。

今回のシンポジウムでは韓国の多くの研究者と知り合うことができ、今後の竹幕洞と将来的に調査研究を共同ですすめる可能性が出来た。あわせて、韓国の特に研究者においては本遺産群についての認知度と関心が高いことを知り得る機会となった。

エ．世界遺産ボランティアプログラム 2025

主 催：PERCIVE（バングラディッシュ）

日 時：令和7年11月18日（火）報告者：岡寺 未幾
世界遺産の保存管理の技術習得と実地研修をあわせたボランティアプログラムにおいて、本遺産群の事例をオンラインで報告。

本誌のデータは、本遺産群のデジタル・アーカイブ
「MUNAKATA ARCHIVES」の「宗像研究文献」より
閲覧・ダウンロードできます。
<https://www.munakata-archives.asia/>

沖ノ島研究 第12号

令和8(2026)年7月発行

発行：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
(事務局：福岡県市町村・地域振興部文化局九博・世界遺産・文化施設課)
〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7番7号

ISBN 978-4-9913533-5-2